

# 音楽への向き合い方は 昔から今も変わらない

## ピアニスト イーヴォ・ポゴレリッチ

Ivo Pogorelich, piano

©Andrej Grlic

### イーヴォ・ポゴレリッチピアノリサイタル

令和7年1月25日(土) 14:00開演

君津市民文化ホール 大ホール

一般¥7,700 U-30(30歳以下)¥3,850 小中高生¥500

(全席指定) ※未就学児入場不可

——年々レパートリーが変化していく中で、現在熱心に演奏に取り組みたいと考えている作曲家はいますか？

普段はそのような質問は避けているのですが、最近初めてシューベルトのいくつかの作品を演奏しました。彼の音楽には親密さを感じます。

——ポゴレリッチさんは若手演奏家への支援活動を行われていますが、千葉県もいま、若手アーティストへの支援を積極的にを行っています。こうした活動について考えていることや、若手演奏家へのアドバイスや思いをお聞かせください。

1980年のシヨパン国際ピアノ・コンクールで衝撃的なデビューを飾って以来、ピアノ界の異端児として独自の地位を築いたイーヴォ・ポゴレリッチさん。その比類なき演奏に込めた思いや、定期的に来日公演を重ねている日本への印象などを語っていただきました。

——ポゴレリッチさんは1981年に初来日し、2005年から日本で定期的にコンサートを開催されています。海に囲まれ、独特の文化を育んできた日本についてどのような印象をお持ちですか？

初めて来日した時、日本は遠い国でした。私は日本を、異なる世界への入り口として、またそのような若い頃に招待されることを光栄だと考えました。日本文化の様々な側面に触れ、その素晴らしさとユニークさに気づかされました。

——千葉県は3方を海に囲まれている地域ですが、幼少期からこれまでで、何か海にまつわる思い出はありますか？

子どもの頃、夏休みによく行ったアドリア海の思い出があります。海にはいつもエネルギーがありますね。

——日本のコンサートの聴衆に対して、音楽の聞き方や反応などにおいてどのような印象を抱いていますか？

日本のお客様はアーティストにとっても気を配り、敬意を払います。また、コンサートが終わるとアーティストに会いに来て、感謝の気持ちを表しますね。

——日本の若いアーティストたちは、文化機関が彼らの育成に支援してくれて幸運です。若いアーティストへのアドバイスとしては、与えられたすべての機会をフルに活用し、ベストを尽くすことです。

——2025年1月に君津市民文化ホールで開催するピアノリサイタルへの意気込みをお聞かせください。

公演してお客様との出会いをとても楽しみにしています。

聞き手・溝口麻優子(公益財団法人千葉県文化振興財団)

——ポゴレリッチさんが一躍有名になったシヨパン国際ピアノ・コンクールから44年が経ちますが、当時と今で音楽に対する向き合い方や価値観に変化はありますか？

私の姿勢や価値観は変わっていませんが、時間とともに経験を積んできたことは明らかです。

——ポゴレリッチさんの演奏は表現豊かで自由奔放なスタイルが魅力的ですが、ご自身の演奏でこれまで大切にしてきたことは何でしょうか？

私は常に音の質を追求し、楽器から最高のものを引き出そうとしてきました。そして、演奏を通じて曲の美しさを表現し、聴衆と作曲家の距離を近づけようとしています。



©Andrej Grlic

### ●プロフィール

1958年ベオグラード生まれ。数々の国際コンクールでの優勝に続き、1980年のシヨパン国際ピアノコンクールでの落選とそれに抗議して帰国した審査員アルゲリッチの「だって彼は天才よ!」という言葉によってポゴレリッチは「躍脚光」を呼び、たちまち世界的に名を知られることになった。1981年のカーネギーホールでのデビュー以来、世界中で活躍し、リサイタルのほかにも、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロンドン響、パリ響、シカゴ響、ボストン響などと共演を重ねてきた。教育にも熱心でクロアチアには財団を、ドイツのバート・ヴェリスホフエニではポゴレリッチ音楽祭を設立し、若い音楽家たちに多くの演奏機会を与えている。また赤字やサラエヴォ再建、癌や硬化症と闘う人のためにも多くのチャリティコンサートを行っている。1981年、ドイツ・グラモフォンから録音デビュー。10数点のCDリリースはいずれも人気を博した。1995年以来録音が途絶えたが、2019年にソニーと契約、ソニー・クラシカル・レーベル・ヴェン、そして2022年2月にはシヨパン・アルバムが発売され、反響を呼んでいる。数年間の療養を経て2005年に6年ぶりの来日を果たして以来、定期的に来日している。